

桶狭間合戦考

服部 英雄

キーワード

海岸堡 降雹 水軍 桶狭間山 織田信長 今川義元 松平元康（徳川家康） 大高城 鵜殿長照 熊野水軍 梶川平左衛門 鳴海城兵糧入 大野衆 小川（緒川）衆 信長公記 天理大学図書館本 三河物語

要旨

桶狭間合戦を桶狭間山での局地戦ではなく、伊勢湾北部の制海権に関わる総力戦としてとらえ直した。『信長公記』に大高城・鳴海城に関わる潮汐記述があるように、絵図に海、入江が描かれるように、両城は海の城（海岸堡 beachhead）である。今川方の大高城主鵜殿長照の苗字の地「鵜殿」は三河ではなく、紀伊・熊野で、熊野川河口左岸にあった。熊野別当湛増を祖とする鵜殿は熊野系水軍で、今川義元は尾張侵攻の布石として、鵜殿長照を城将に配した。織田方・大野衆（佐治）、緒川衆（水野）が加わった大高城をめぐる攻防は海戦で、兵糧入れに軍船が使用された可能性が高い。近世に尾張藩が作成した絵図も陸側ではなく、海側の視点から描いている。今川方鳴海城の軍船を制御したのは織田方・中島砦で、守った梶川平左衛門は、同盟者緒川水野の家臣で、信長配下ではなかった。河川水軍として卓逸し、信長に懇望されて鳴海城至近からの鳴海津の軍船攻撃を担い、鳴海城の機能を喪失させた。

緒戦（朝合戦）の鷺津・丸根の攻防は海戦に始まる。最終合戦（惣崩）終了後、圧勝した織田方は大高城、鳴海城両城を無視し攻撃しなかったように、動産である軍船の多くは、無傷だった。今川義元の敗因は野営中に雹（ひょう）に打たれたことにある。織田信長の勝因は降雹を施設内（丹下砦・善照寺砦・中島砦）でしのいだことにある。野ざらしでの暴風雨と、著しい気温の低下で、今川方は体力および火器の機能を失い、対する信長方は自在に鉄砲を打ち込み、圧勝した。

目次

はじめに 本稿の基調

（一）海からの視点

（二）氷雨・降雹

（三）史料について

一 海からの視点

（一）熱田・大高・大野の海上交通

（二）海城（海岸堡）としての大高城、鳴海城

（三）大高城将鵜殿長祐・長照は熊野水軍

（四）中島砦・梶川平左衛門

（五）大高城兵糧入は海路から

（六）帰路について

二 降雹

(一) 後巻・今川義元の行動

(二) 清洲から宮へ・名古屋(那古野) 城ほかに配備された兵と馬と武器

(三) 宮から鳴海 下道と上道(東海道)

(四) 朝合戦

(五) 降雹の直撃 桶狭間山本陣

(六) 惣崩・鉄砲隊射撃

むすび 桶狭間合戦は海陸の戦い

図版目録

図1空中写真

口絵4・5 蓬左文庫大高城図・大高鷲津丸根図

図2 鳴海城 図3 沓掛城 図4 大野城

はじめに 本稿の基調

永禄三年(一五六〇)五月十九日、桶狭間合戦は織豊時代のスタートで、天下を狙うことになる織田信長の第一歩である。織田信長は清洲城が居城だが、名古屋(那古野)城の主でもある。軍事的緊張が増し、名古屋城の機能も強化される。総力戦として管轄下の軍事施設・基地はフル動員される。

信長は少数の兵力で数倍の敵を撃ち破り、御大将・今川義元を戦場に討ち取った。その首級は清洲に運ばれた。通常、大將は安全な後方に

陣を構え、二重三重に守られる。劣勢になれば、いち早く戦場を離れる。大將の戦場での敗死はわずかな例しかない。劇的な勝利であった。いったい何が起きていたのか。

事件を説明するにあたり、本稿は以下の視点三つを提示する。

(一) 海からの視点

『信長公記』に「鳴海の城、南ハ黒末の川とて入海、塩の差引、城下迄在之(中略)今川義元、沓懸へ参陣、十八日夜に入、大高之城へ兵粮入、無助様に、十九日朝塩の満干を勘かへ、取出を可払之旨必定と相聞候之由」とある(『愛知県史』資料編14・五六、五七頁)。海と塩についての記述が複数ある。なぜ潮流についての記述があるのか。二つの城は潮の影響を大きく受けていた。つまり海城(海岸堡 beachhead)である。十九日朝の潮汐は戦局に大きな影響を与えるものだ。『信長公記』のこの記述は、両城の本質が海の城であることを明白に語っている。大高城への兵粮入の文脈にて、潮を考慮し実行するとあった。ならば海路が使われていた。

『信長公記』天理大学図書館本は、大野衆・緒川衆という水軍の動向にも触れている。すなわち織田方の配陣記事の末尾に「大高之南大野・小河衆被置」とある(『愛知県史』同上・五七頁)。大野・小河は知多半島西と東、それぞれの湊である。この記述は前段に善照寺、中島、鷲津、丸根の各砦とその守将の名を記している。改行して、この記述になるが、「砦」の語がなく、城将の名前が書かれていない。彼らが水軍であったからで、砦ではなく軍船で守り、戦い、衆として行動した。大高の南は地理的には丘陵であるが、今よりずっと海が近接していた。当時の人た

ちが南は海と理解していたことは、関連する絵図などにあきらかである。
う。

織田方水軍大野衆（佐治）・緒川衆（水野）という西・東の水軍が、大高城・鳴海城（根古屋城）、そして今川方に与同する鯛浦服部水軍（木曾川河口）と、三角形・四角形で対峙した。また鳴海城を撃射した中島砦の守将、梶川平左衛門は緒川水野の配下であって、信長からの指令を受ける立場ではなかったが、水軍としての特殊技能により入城を要請された。

天理本の紹介は流布していた陽明文庫本よりも遅れた。この記事によつて、大野・緒川を結んだベルト地帯を織田方が掌握していたことが明らかになった。知多郡北半部はけつして空白地帯ではない。尾張に入つた今川義元は、この敵対勢力を警戒しつつ、行動しなければならなかった。桶狭間山から動けなかった理由であろう。海と陸の動向が鍵となる。『信長公記』の著者太田牛一の周辺には陸戦参加者が多かったから、華々しくドラマチックだった陸戦の勝利を詳しく描写した。海戦は別の部隊の行動だから、簡略にしか叙述されなかった。これまでの桶狭間研究において、海の記事に着目し、分析し言及した研究はきわめて少なく、むしろ主流ではない。

これまでの研究を読む限り、潮汐を利用したとする『信長公記』の記述は活かされなかった。行動を阻害する与件として、海をみる見解が主流であった。以下、本稿では大高城・鳴海城の機能を海から考える。松平元康の大高城兵糧入については海路による可能性を追求する。むしろ、これまではそうした提案はない。本稿は等閑視されてきた海が持つ意味を、積極的に取り上げ、戦いを考え直す。桶狭間の合戦は桶狭間山周囲

の局地戦ではなく、伊勢湾での制海権争奪を含む、知多半島北部、陸・海の合戦ではないか。

（二）氷雨・降雹

桶狭間合戦があつた永禄三年五月十九日をユリウス暦に直せば、一五六〇年六月十二日となる。真夏といってよい。その昼、『信長公記』によれば「急雨石氷を投打様に」とあつて、俄雨になり石のような氷塊が降つた、という。降雹、氷雨である。陽明文庫本は急雨にムラサメと読み仮名をふる（天理本は「大雨」）。ムラサメは「驟雨」のことで激しくなつたり、弱くなつたりするニワカ雨をいう。

二〇二〇年六月、筆者は雹を体験した。思いは桶狭間に及んだ。雹は積乱雲の急激な発達の原因である。場合によつては雷が鳴り、大雨が降る。『三河物語』は「車軸の雨」が降つた、と表現した。

『尾張名所図会』は雨中の決戦の様子を描いている。嵐をついて、信長が義元本陣に突入したというイメージが定着していた。しかし『信長公記』には、雨中の戦いとは書かれていない。「身方（味方）ハ後の方に降かゝる」、「空晴るゝ」とある。信長方は雹を「後（あと）の方」にすることができた。

雨が勝敗の分かれ目になったとは、だれしも考える。新田次郎に「梅雨將軍信長」という作品がある。天文所に務めた経歴のある平手左京亮という人物が、その日に豪雨が降ると予想したことを受けて、信長が籠城策から野戦に切り替えたとしている。文学者である以前に気象学者であつた新田次郎らしい着想で、平手は新田次郎自身の投影である（ただし桶狭間は梅雨ではなく雹である）。

ところがアカデミズムの側での雨の影響を分析した論考は皆無に思われ、不思議に思うほどだ。小和田哲男『図説 織田信長』（二〇〇二・河出書房新社）では「折から暴風となり、奇襲されることを全く予測していなかった今川勢は総崩れとなった」とするが、原因・結果の説明がない。小和田『軍師・参謀』（中公新書・一九九〇）では「西から東」、つまり信長に追い風となった「風の吹き方」が信長勝利につながったとするけれど（一一八頁）、説得力を感じない。

過去の歴史家は「石水」も「車軸の雨」も体感できないまま、『信長公記』に記された軍事行動を追跡した。本稿は降雹・氷雨こそが信長に直接的な勝機を与えたと考え、義元と信長、それぞれの位置と行動の関係を、時刻を追って復原する。信長隊は砦にて氷雨をやりすごし、晴れ間をみて桶狭間山・義元本陣に突入した。当然、鉄砲が駆使できた。野営地で昼食中、降雹に打たれた義元本陣はしぶ濡れになり、急激に低下した気温と強い風に混乱していた。軍事行動は大きく制約される。勝因は気象への対処の差にある。これが第二の視点・切口である。

（三） 一次史料と二次史料

合戦について記す史料は多くはないが、『信長公記』という望むべき最高の史料がある。これまでの桶狭間研究は、事実上『信長公記』研究であつた。なくてはならない史料ではあるが、しかし『信長公記』には口承文芸的な要素もある。陽明本と天理本、相互の出入り・差異は、語り物として、文字化されなかったことに由来するのではないか。語り物であれば、聴衆の歓心に迎合し、史実から離れ、作品化、物語化もされる。歴史学では一次史料である書状や感状など、ほぼ時間をおかずに、当事

者・関係者により作成された史料を、リアルタイム史料として重視する。本稿でも桶狭間に関わる一次史料を最優先する。数は少ないけれど、研究史が取り上げなかった貴重な記述は案外にあつて、『愛知県史』や『静岡県史』に収録されている。信長鉄砲隊の行動は『信長公記』に記述はないけれど、古文書に明記されている。

本稿は古文書を主とし、編纂叙述を従たる史料とする。『信長公記』は一定の留保を付して使用する。不自然な記述があれば、保留し、絶対的な信頼をおかない。

本稿が依拠した関係史料集は『甲陽軍鑑』を引用しない。『甲陽軍鑑』は他国（遠国）にいる当事者ではない人物による記述で、叙述は創作が多い（藤本正行『桶狭間の戦い』）。もし今川軍による「乱取り」があつたのなら、奪った甲冑や人をそのあと、どう運ぶのか。勝利してさらに熱田や清洲侵攻となった場合、どうしたのだろう。不自然にしか思われない。

図1 空中写真（大高城・鳴海城付近）



巻頭口絵4 尾州知多郡大高古城図（蓬左文庫蔵・図225―1）

巻頭口絵5 尾州知多郡大高之内鷺津丸根古城図（大高兵糧入）

（蓬左文庫蔵・図226―1）

図2 杳掛城跡 公園整備前、民有地の頃、堀跡は水田であった。

服部英雄『昭和三十年代 濃尾平野周辺の中世城館』より





図3 鳴海城跡
服部英雄『昭和三十年代 濃尾平野周辺の中世城館』より



図4 大野城跡 青海台団地造成中、土木作業員が写っている。復原建物風展望施設はまだ建てられていない。
服部英雄『昭和三十年代 濃尾平野周辺の中世城館』より

一 海からの視点

(一) 熱田・大高・大野周辺の海上交通

最初に永禄期の知多半島北部、伊勢湾沿岸の交通形態を確認したい。永禄十年(一五六七)八月二十八日の奥書がある紹巴の『紹巴』富士見道記』(『群書類従』第一八輯、『中世日記紀行文学全評釈集成』第七巻、勉強出版、二〇〇四)を読むと、七月十九日には刈谷城から緒川城、あふ坂を経て大野城に行っており、陸路である。七月二十七日には、大野より、まはし(馬走瀬・馬馳瀬、尾張横須賀)まで馬で行き、それより海路で熱田に到着している。また八月十八日は「大高城より水野防州迎ひ船を、加藤庭に押し入れたり(中略)思ふ方の風吹きて、船端叩きて歌ひかはし、大高に入り了んぬ」とある。大高、熱田間は海路が頻繁に用いられている。

ちなみに「まはし」(馬走瀬)まで陸路で行き、あとから海路を選択した日、つまり旧暦七月二十八日(月齢27)に相当する日、二〇二〇年ならば六月十九日になるが、名古屋港の満潮は4時12分で潮位82cm(T. P.)、干潮は10時50分、潮位マイナス95cm(T. P.)、朔日に近い日で大潮だった。午前は船による北上は11時近くまで、逆潮となった。この時間帯、急ぐのなら陸路しかなかった。陸と海を半々に選択した理由がよくわかる。熱田から大高へ向かった日、二〇二〇年で旧暦八月十八日に相当する月齢(17)の日は七月八日で、13時59分が干潮だった(潮位マイナス103cm(T. P.)、満潮は7時10分、潮位94cm(T. P.)、以上は気象庁ホームページ・潮位表による)。朝から14時まで南流がある。風に恵まれ、「船端を叩いて喜んだ」とある。潮汐のみでは遅く感じられ、

順風を得て、やっと速度を感じた。

また常滑水野家の水野監物について、天正二年(一五七四)長島一向一揆との合戦のおり、「監物アタケ舟に乗り長嶋に押寄る」という記事がある(「水野家譜」、鈴木泰山「常滑城主水野監物家の新史料について」『曹洞宗の地域的展開』六一頁・所収)。水野監物(直盛)は織田信長黒印状を多数受け取っている(『織田信長文書の研究』下・二六五・二七〇)。伊勢湾北部をアタケ船が往来していた。鈴木泰山は『知多郡史』中巻所収の「内海年代記」に「從勢州戸羽悪竹申者、内海浜へ船を着衆(舟)中、拾八人乗り、寺民家を悉く乱妨致し」とある記事から、アタケ(悪竹)を「軽快な軍船」としている。いわゆる安宅船だとすると十八人は小型に過ぎるか。『宗長手記』には大永二年(一五二二)に、宗長が常滑水野紀三郎屋敷から伊勢大湊へ渡ったとある。

常滑ならびに緒川の水野、大野の佐治、いずれも多数の小早を従えている。水軍の存在を前提にしなければ、この地域の軍事情勢を読み解くことはできない。

(二) 海城としての大高城、鳴海城

海を越えて敵方を攻めるときは、海岸に近い山を確保し、陣地化を図る。すなわち海城、イコール海岸堡 beachhead²⁾である。山で高さを得れば、弓・鉄砲・投石などの武器の使用にて、山上・守城側のみが武器(飛び道具)を有効に使用できた。山下・攻城側は武器が使えず、山上・守る側が圧倒的に有利である。海岸堡の典型は文禄・慶長の朝鮮半島・倭城であり、港と山を連結させている。

大高城、鳴海城の両城こそ海岸堡の典型である。鳴海潟つまり愛知潟

（年魚市^{あゆち}湯）に注ぐ「てんばく」（天白）川支流の大高川および黒末川（扇川）、それぞれの津、大高津、鳴海津の背後に築かれた海城（海岸堡）であり、常に海の干満の影響を受けていた。『信長公記』は黒末川を「入海」と記述する。

蓬左文庫には大高城・桶狭間に関する絵図が多数ある。大高城は東照大権現・徳川家康の戦跡・聖跡であったから、尾張藩では念入りに調査し、顕彰したのであろう。「尾州知多郡大高古城図」（図225-1）およびそれと一体の「尾州知多郡大高之内鷺津丸根古城図」（副題「大高兵粮入」）（図226-1）に、海と舟入れ川が詳しく描かれる（『大府町誌』に紹介、本紀要巻頭カラー参照）。舟入れは、東の天神森まで同じ幅員があつて、そこより流路が南に曲がつて、細くなる。深さも一定とある（「水の深さ大形いつも同じ 小舟出入り有」）。海からの干満がある限り、深さには変化があるはずなので、同じ深さがあるというのなら、引き潮にも水が抜けないような工夫と、一定の深さに奥側にプール状の掘削があつたという意味だろうか。

「大高兵粮入」と副題のある図は二点、上記の鷺津・丸根図（図226-1）と蓬左文庫・桶狭間之図（図369-1、『愛知県史』通史編3所収）がある。両者いずれでも、兵粮入の具体的な様相の描写はなく、画面の八割から九割が平野ならびに海で、川と海の関係が図示されている。三河につながる陸路の描写・記述はない。大高城・鷺津砦・丸根砦が、知多の海と汐入川であるてんばく川・大高川・扇川を前提に機能した城砦であることが、絵図に明示されている。兵粮入を考えるばあい、海からの視点が重要であると、江戸時代の軍師・兵法家も考えていた。

参謀本部編『日本戦史・桶狭間役』（明治四十三年）の挿図は二万分之一図から作成とある。海が広い。明治二十四年陸地測量部の地図では海はこれほど広くはないので、江戸時代以前の地形を想定して江戸時代の新田など、自然状態で満潮時に海水が到来する地域を海として図化したようだ。

今川方の鳴海城（愛知郡）は北に丹下砦、東に善照寺砦、南東に中島砦と、それぞれ織田方の砦に包囲されていた。それでも西に海につながる扇川があつたから、兵員、物資の搬入はできた。海路からの兵站で維持される海城である。中島砦は一見すると防御能力に乏しいかにみえる低平地に置かれた。鳴海城下・鳴海津に出入りする軍船・商船の掣肘が目的だったからで、至近の扇川（黒末川）上流に築城した絶妙な配置であつた。鳴海城の行動は妨害され、鳴海津も逼塞し、機能不全に陥つた。織田方の善照寺砦、中島砦、さらには大高城（今川方、知多郡）の東には鷺津、丸根砦も築かれ、完全に封鎖された。このような砦の構築を許したということは、桶狭間合戦以前、今川義元行軍以前の今川方が、陸上の軍事支配権（いわば制陸権）を知多郡北端と愛知郡南端にて喪失しつつあつたことを意味する。

織田信秀の死後、鳴海城の山口左馬助、同九郎二郎が今川方につく。今川方は、笠寺、（桜）中村にも要害を築き、今川軍事支配域は北上した。しかし今川義元は山口父子を駿府に呼び寄せ、生害させた（『信長公記』）。この背信行為に離反が相次ぎ、これら地域は再び織田方になった。永禄初年、今川方は鳴海城、大高城という海に接する二つの「点」を確保するにすぎなかった。南方には織田方の緒川・水野、大野・佐治、さらには阿久比・久松らがいた。太い反今川ベルトである。鳴海、大高両城の

連絡路、唯一の補給路は海からとなる。

松平元康が大高城兵糧入を行う必要があったのも、陸地が織田方に制圧され、包囲されていたからである。陸は安全地帯ではなかった。知多郡・愛知郡境での今川布石が機能しなくなったことから、大将今川義元への出陣要請になった。

(三) 鵜殿長祐・長照は熊野水軍

桶狭間合戦時の大高城の城将について『信長公記』はなにもふれていない。しかし関連する今川方発給の文書が残されている。前年のA永禄二年八月二十一日・朝比奈筑前守宛て今川義元判物写（泰能、土佐国蠹簡集残編三、『静岡県史』資料編7中世三・二七〇五）、およびB年欠（永禄三年）六月十二日・今川氏真感状写（鵜殿系図伝巻一所収、『静岡県史』資料編7中世三・二七九八）の二通である。写とはいえ、ともに一次史料に準じて扱うことができる。

A

此度召出大高在城之儀申付之条、下長尾一所之事、一円永所宛行之也、於遂在城、連々可扶助、彼郷之内、前々之被官等、無相違所還附也、守此旨、用心已下無油断可勤之者也、仍如件

永禄式己未年

八月廿一日 治部大輔（今川義元）（花押）

朝比奈筑前守殿

永禄二年八月には掛川城主でもあった朝比奈泰能が城将であった。城

料（城郭維持経費）に下長尾（遠江国榛原郡下長尾か）を得ている。⁴

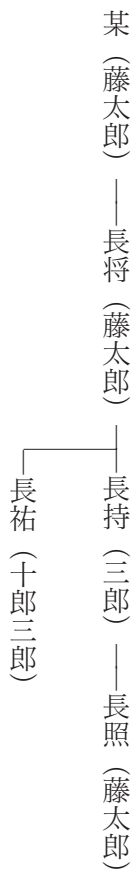
B

去年十一月十九日、去五月十九日於尾州大高口、両度合戦之時、太刀打被鎧疵三ヶ所云々、無比類働尤神妙候、弥可抽戦功者也、仍如件

六月十二日 氏真判

鵜殿十郎三郎殿

鵜殿十郎三郎は「鵜殿系図」（『愛知県史』資料編14、系図家譜三〇）に



とあり、長持の弟、長祐である（長助ともある）。

永禄二年八月には今川家中の大神中の大身であった朝比奈泰能が城将であったが、二ヶ月後、同年十月には十郎三郎鵜殿長祐が登場する。

今川義元はいつごろ尾張攻撃を決めたのか。有光友学『今川義元』（人物叢書・二〇〇八年）にあるように、義元自身が公表し、周辺も知るようになったのは三月、四月で、「近日義元、向尾州境目進発候」「夏中可令進発候」とある。準備はその前から進められている。前年・二年にも、秋口に侵攻を開始する（「何様、来秋必令参陣候」）、と言明していた⁵。大規模な動員計画が進むなかでの二度に及んだ大高城城主交代は、当然

に一連の動きである。

永禄三年段階で、大高城の城主が鵜殿一族であったことは、ほとんどの史料が一致している。徳川方の記録『三河物語』では「大高にハ鵜殿長勿（長持）番手に居タリ」、また『松平記』は鵜殿長助とする。ほぼ同時代史料である『落照露言抄』^{らくしょうろげんしやう}（城兵庫・上巻天文二十年（一五三三）・下巻天正元年（一五七三）、新日本古典籍総合データベースによる）では「永禄二年先屋形様、鵜殿長助・長宗をして尾州大高の城を守らせ給ふ」とある（長宗は藤太郎長照）。「永禄二年」とあつて、Bにあつた「去年」に一致する。大高城は鵜殿長持の子である長照と長持の弟である十郎三郎長祐、叔父と甥が守っていた。

鵜殿一族が朝比奈泰能の配下として在城したのか、あるいは交代して入城したのか。これ以降、大高城と朝比奈の関わりを示す史料は見られないし、上記のような史料状況からすれば、交代であろう。

大高城を最枢要視し、能力の高い人員を配置する。鵜殿一族が選ばれた。来るべき作戦行動を前提にした強化策、布石である。

長照の母、つまり長持妻は今川氏親女子であり、長照は今川義元の甥になる。今川氏親は女子を鵜殿長持に嫁がせた。同盟者・家臣団中でも、鵜殿氏を最重視していた。なぜなのか。鵜殿一族にはどのような力があつたのか。

鵜殿氏は三河国宝飯郡西之郡の領主で上之郷城主（宝飯郡西之郡・蒲郡市神之郷町）であつた。三河湾まで1・5 kmの距離である。

鵜殿という地名は三河にはない。紀伊新宮鵜殿村が苗字の地である。鵜殿村は熊野川河口左岸で、海（熊野灘）と川（熊野川）に面していた。上掲『寛政重修諸家譜』には、鵜殿長持は紀伊熊野村常香の末裔とあり、

鵜殿一族は熊野別当湛増を祖とするとしている。

かれらの根拠地、西ノ郡一帯は三河国竹谷蒲形両庄に属し、『吾妻鏡』元暦二年（一一八五）二月十九日条に「熊野山領参河国竹谷蒲形両庄事、有其沙汰、当庄根本者開発領主散位俊成奉寄彼山之間、別当湛快令領掌之、讓附女子」とあり、藤原俊成による熊野山への寄進後、別当湛快の子孫に伝領されていた。湛快は湛増の父である。この関係があつて、熊野鵜殿村から、三河鵜殿一族の祖が下司（相当の）職として移住した。

鵜殿は熊野川の河口にあり、熊野水軍の最大根拠地である。河口だから松・杉・檜の良材も得やすく造船適地である。かれらの移動の背景には熊野灘から伊勢湾・三河湾への水運把握があつた⁷。永禄元年（一五五八）「熊野新造」という三十挺艦の大船が伊豆水軍にあつた（北条家朱印状写・大川文書『静岡県史』資料編7中世三・二六六一）。熊野は造船でも操船でも卓越した技術を誇った。

三河鵜殿一族は三河海岸部（宝飯郡西部）を領地とし、熊野水軍・鵜殿村をルーツとし、鵜殿名字を名乗り、アイデンティティを共有する海民・水軍である。鵜殿長祐・長照には熊野水軍の卓越した技術が伝承されていた。彼らが最前線にある海岸堡の城将になったことは、水軍機能強化、決戦への備えである。海岸堡・大高城こそ今川（鵜殿）水軍の前線根拠地といえる。大高には軍船が常時、碇泊していた。

なお先に引用した史料B（十七頁）には「去年（永禄二年）十一月十九日」にも大高口で合戦があつたと記されている。同じ文中にある五月十九日は桶狭間合戦を指すから、この年欠文書は永禄三年である。大高口では二年間で二度、合戦が行われていて、いずれも鵜殿長祐が奮戦した。十一月十九日は正しくは十月十九日らしい。奥平監物（定勝）、

菅沼久助宛ての年欠十月廿三日義元感状が二通残っており、そこにも「去十九日、尾州大高城江人数・兵粮相籠之刻」とある。十月廿三日以前の「去十九日」の合戦だった。桶狭間合戦の夏ではなく、前年永祿二年十月十九日に三河・鵜殿勢による人数と兵粮入が行われていた（松平奥田家古文書、浅羽本系図、『静岡県史』資料編7中世三・二七〇～一一）。前者の「人数」は兵員であるから、そのときまでは大高城が織田方の支配地だったことも想定できる。

（四）中島砦・梶川平左衛門

今川方鳴海城への物資運搬を担う鳴海津は、塩の満干みちひのある扇川にあつて、潮汐限界内という地の利を生かした湊である。織田方中島砦はその扇川（本流）と鎌研川（支流）の合流点にあつた。鳴海城のわずか500m上流であつて、川べり低平地に立地していた。挑発的なまでに敵の眼前に位置し、かつ上流だったから、有効で戦略的な妨害活動ができた。しかし攻撃もされやすかった。善照寺砦からの側面援護はあつただろうが、緊張に満ちた最も危険な砦と考える。

その困難な任に当たった守将が梶川平左衛門である。のち『信長公記』巻一・永祿十一年十月二日摂津池田城攻めの記事に「水野金吾内に無隠勇士梶川平左衛門」と絶賛された人物である。金吾は衛門府の唐名であるから、「右衛門大夫」だった水野忠政を指す（『寛永諸家系図伝』）。忠政は信元の父で苅屋・小河・大高に拠つた。尾三国境、海べりの城（感潮河川境川・逢妻川沿い）で、信元の名乗りは下野守であるが、この家を指す場合は「水野金吾」といったものか。金吾「内」とあるのだから、信長の直臣ではなく同盟者の家臣であり、信長直接の命令を受ける立場

にはなかった。梶川五左衛門（『寛永諸家系図伝』では平左衛門弟）は天正十一年（一五八三）九月七日、延命寺（大府市）への寄進状を残しており、尾三国境・海辺の支配が確認できる（延命寺文書・『愛知県史』資料編12・七七頁所収）。『尾張御行記』第六・大脇村（一八三頁）をみると「大脇城 府志古城条曰 在大脇村、梶川五左衛門居之、今為田圃、按梶川五左衛門者水野家人也」とあり、同様の記述は『尾張志』横根城主の項に「水野氏の臣梶川五左衛門」とあつて、水野家中であつたことはまちがいない。

鳴海津上流の中島へは、船での遡上は時間に制約があり、逆に中島から鳴海津への船は下りだから、いつでも迅速に行動できる。作戦次第で優位を確保できたけれど、至近にすぎた。最前線の危険な砦に、直臣ではなく友軍の家臣を入れた。梶川は水野が管轄する苅屋・小河の海域、およびそれにつながる境川の支流域を基盤としていた。地形に応じた戦法に優れていたのだろう。そうした武士団は織田家中に手薄だった。梶川は水軍を率いる将で、大型軍船を操るよりも、河川を上下する小型兵船操作に優れていたようで、水野配下ではあつたが、信長の懇望を受けて、この砦に入り、功績も挙げた。こうした経歴があつたからこそ、「隠れなき勇士」と評価されていた。いわば特務機関的な傭兵要素を持っていたと考える。

当日織田信長は鳴海城の至近を通過した。丹下砦から善照寺砦への信長軍通過に対し、東海道筋を掌握していたはずの鳴海城は、何ら行動も制止もできなかった。すでに軍事的な貢献が果たせないほど疲弊していたものか。中島砦への梶川配置とそこからの波状攻撃は、鳴海城の機能を低下させ、さらに今川義元自らの出陣を招き、結果からいえば、桶狭

間勝利の遠因にもなった。¹⁰

この配置に尾三国境で苦渋を舐め続けていた水野信元および梶川平左衛門の高揚感と決戦意欲、そして織田信長の凡庸ならざる才覚を読みた

い。
水軍梶川の活躍は各地で確認できる。まずは熱田で加藤隼人佐に宛てた梶川五郎左衛門尉秀盛（平左衛門弟）の年欠四月二十日書状が熱田・西加藤家文書に残されている（『愛知県史』資料編12・一六九五）。「わうせこの孫七方屋敷を上様の御弓衆である稲熊助右衛門尉の口入（仲介）で引き得たところ、今度御陣で御留守中に加藤隼人佐の違乱で、こぼされた（破却された）」。破却を問責し、理由を糾している。「わうせこ」は熱田大瀬子（浦）で魚市があり、『尾張名所図会』にそのにぎわいが描かれる（木之免町、大瀬子公園に旧町名の名残）。魚市場は海からの物流交易の場で富があった。そこに拠点を設けようとした新興勢力梶川は、加藤隼人佐と抗争になった。なお尾張國中々村の代官・稲熊助右衛門の娘は『太閤素生記』の著者とされる土屋知貞の養母というから、上様は織田信長である。

船手奉行としての梶川は加藤清正配下に確認できる。『続撰清正記』（続清正記、熊本県立図書館・林田家文書、『肥後文献叢書』）、あるいは『宇土軍記』（熊本県立図書館）をみると、「大坂におかれたる大木土佐守と船奉行の梶川才兵衛」、「清正之舟奉行梶原助兵衛・身上五百石・有説には梶川才兵衛と云々」とある。前者『続撰清正記』の奥書に梶川才兵衛の祖父が梶原助兵衛景俊で高麗陣の惣船奉行だとある。梶原助兵衛（景俊）は播磨赤松の配下とされ、黒田如水宛の注文を残す（黒田家文書1

167、福岡市博物館・イメージアーカイブに画像）。

『肥後加藤侯分限帳』によれば、この分限帳は森本儀太夫所持本を時習館本で朱筆校訂したもので、梶原才兵衛を朱筆で梶川才兵衛に訂正している（一七〇石）。

また梶原水軍といえは後北条水軍の「船大将の頭」といわれた紀伊出身梶原景宗が知られていて、苗字・通字が共通する（下山治久『後北条氏家臣団（人名辞典）』二〇〇六）。水軍ブランドとしての梶原は、東海から関東（尾三・伊豆・相模）・瀬戸内地域（播磨）において活躍した。梶川平左衛門・五左衛門の系統は尾張のつながりで加藤清正と主従関係ができたと推測する。水軍力を媒介にして、婚姻や養子を通じて梶原水軍に接近したとみたい。天正十二年六月十六日尾張蟹江合戦に連動して、大野城沖海戦が行われた際に、織田信雄が梶川五左衛門秀盛の船を派遣し、大野城山口重政を支援させている（『寛永諸家系図伝』山口重政）。ルーツは尾三国境、汽水地帯にあつて、桶狭間以降は信長家臣団との強いつながりもできたが、梶川平左衛門は摂津で戦死するまで水野の家臣という立場を変えることはなかった。¹¹

（五） 大高城兵糧入

『信長公記』に五月十九日朝の潮は今川方が軍事行動する上で、もつとも有利な時間帯であると、記されていた。あらためて読み直す。

今川義元、杵懸へ参陣、十八日夜に入、大高之城へ兵糧入、無助様に、十九日朝塩の満干を勘かへ、取出を可払之旨必定と相聞候之由

年/月/日 (曜日)	満潮				干潮			
	時刻	潮位	時刻	潮位	時刻	潮位	時刻	潮位
2020/06/10(水)	7:59	77	21:47	79	2:31	-15	14:55	-92

表1 名古屋港の潮汐 (2020年6月10日)¹²⁾

複雑な文章だが、「十八日夜に入」は「相聞候」にかかって、丸根・鷺津からの情報伝達の日時である。「無助様」(たすけなきよう)は「援助・支援がないよう」に「取出を可払」というのだから、「助け」は『信長公記』記者の側、織田方の軍事行動の意味となる。それを防ぐために丸根・鷺津を払う。その行動は十九日朝である。兵糧入に伴う軍事行動だから、兵糧入と取出(＝砦)攻は並行して同時に行われた。

潮汐が大きく関係していた。西暦6月の月齢18の日(旧暦19日)は二〇二〇年であれば、6月10日が該当する(閏四月十九日)。名古屋港の潮汐を見ると、午前2時31分が干潮でマイナス15cm(T. P.)、朝7時59分が満潮で77cm(T. P.)、6時間間で1m弱の水位差があった。夜明け(日の出は4時37分頃)から午前8時まで、鳴海・大高に接近する上で有利な流れがあった。この日より前では夜明けから静水となるまでの時間帯が短すぎたのであろう。このことは今川軍も織田軍も周知していた。立ち待ち月だから、月の出は23時以降、朝まで月明かりはあった。

『信長公記』天理本のみに記述のあった「大高之南大野小河衆」の配置とは、大野城衆(佐治氏)を南・大野湊に配置し、小河(緒川城・水野氏)衆は、緒川に置いて義元本陣を牽制させたか、ないしはともに大野周辺に置いたと解釈する。大高城および伊勢湾東沿岸を監視し、攻撃しうる体制を取っていた。今川軍は午前2時30分以降、北に流れ始める潮を利用できた。織田方水軍も沖合に碇泊するか、または早朝に追撃し、潮を利用し大高

沖集結を計画したのであろう。

彼ら水軍の規模だが、文亀元年(一五〇二)十月廿日今川氏親書状写(諸家文書纂所収興津文書、『静岡県史』資料編7中世三・三一八)によれば、今川水軍の根拠地である興津郷では十艘の船(常時出動できる軍船)のうち、五艘の役のことが問題になっている。一船団に軍船(小早)は少なくみて十艘はいたようだ。二十挺艦として一艘に水主が二十人、兵士が五十人とすれば、七百人ほどの軍団で、ほか端舟などが配されただろう(石井謙治執筆の『国史大辞典』「小早」の項では、櫓数はふつう二十挺前後から四十挺までで、六挺立までの小船をも含めることもある)とする。大型船である関船も何艘かは含まれたであろう。

今川の属将であった松平元康(徳川家康)が、大高城兵糧入を行なつて、成功した。兵糧入は織田方包圍網の隙をついて、大高城の食糧を確保するものであった。『信長公記』には「家康は朱武者にて先懸し、大高へ兵糧入」、「鷺津丸根で手を砕き、御心労なさる」とある。詳細は書かれていない。『三河物語』はなぜか永禄元年戊午という別の時の事件を記している。『三河物語』からは何もわからない。

兵糧入とはどのようなもので、何俵だったのか。後世の『三河記摘要』(『朝野旧聞哀藁』二一一七五頁)は大高城に三千俵を入れたとしているが、直ちに信じられるような数値ではない。長篠城の場合、『当代記』によれば天正三年三月、織田信長が徳川家康に進めた米二千俵を境目城々に入れることになって、うち三百(俵)が長篠に用意されたとある。この三百俵を兵糧入の目安の数と仮定してみる(『愛知県史』資料編11・五七七頁、長篠城合戦はこの年五月からであるが、番城は去々年九月からであった¹³⁾)。

内陸河川を使用した事例がある。上杉謙信が武蔵羽生城に、船三十艘で兵糧入を試みた例（天正二年）四月十三日上杉謙信書状・志賀楨太郎氏所蔵文書、『群馬県史』資料編七中世三・二七六五）や、永禄十二年駿東郡吉原での兵糧入が船で行われた事例である。そのおり敵側は千人の兵員を動員した（矢部文書『小田原市史』史料編中世Ⅲ・七七三）。

船を使った兵糧入は決して珍しいものではなく、むしろ馬よりも利点が多い。もし周囲が海だったら、陸路をいくのか、海路を行くのか、どちらを選ぶだろう。

松平軍が海路を全く利用しないということはあり得なかった。¹⁴尾張藩作成の前掲蓬左文庫図が示したように、だれしも海路からの搬入を考える。それゆえに『信長公記』に潮の満干が記述された。

海路であれば、大野・小川の両水軍の布陣を突破しなければならぬ。夜間の通行だった。大野にいた軍船（小早）を上回る数が必要だが、大高城の兵船を加えれば、優位を確保できたと考える。むろん海路とて容易ではなかった。¹⁵

（六） 帰路

桶狭間の敗戦で、大高城という不動産は失っても、そこにあった軍船は資産であって動産であるから、放置はしなかったと考える。大高城は「自落」すなわち放棄した城で、包囲もされていないし、攻め落とされてもいない。圧勝した織田方は当面無視して、空城になるのを待っていた。鵜殿長照も松平元康も健在である。水軍は船で戻る。鵜殿長照の帰路は海路でなければおかしい。松平元康も丸根合戦以後、大高城にい

た。危険な織田制圧地の突破はせずに、鵜殿に同道し、三河湾より矢作川（矢作古川）河口を経て、直接岡崎城に入城した可能性が多分にある。『三河物語』では水野信元家臣の案内を得たとするが、この後も一年ほど、水野とは合戦しているから、不自然である。また、鳴海城も落城していない。

（略）今度於尾州一戦之砌、大高・沓掛両城雖相捨、鳴海堅固爾持詰段、甚以粉骨至也、雖然依無通用、得下知、城中人数無相違引取之条、忠功無比類、剩蒞屋城以籌策、城主水野藤九郎其外随分者、数多討捕、城内悉放火、粉骨所不準于他也、（略）守此旨、弥可抽奉公状如件、
永禄三庚申年六月八日

氏真（花押）

岡部五郎兵衛尉殿¹⁶

「依無通用」と明記されている。陸路からの帰国は困難であった。鳴海湊にあった軍船に乗って、「城中人数を相違なく引取った上で帰国した」と考える。こうした状況で軍船の放棄は考えられない。織田方も逃げるものは追わなかった。しかし岡部の場合は蒞屋城にて水野藤九郎、そのほか「随分の者」を討ち取り放火した。これも海より逢妻川・境川河口に入り、海城・刈谷城を攻撃したように考える。

年欠八月一日の寛平十郎宛の松平元康感状写（『譜牒余録』後編巻十七、『愛知県史』資料編Ⅱ・二四）や同日付でよく似た内容の坂部又十郎宛の文書（朝野旧聞哀藁・『愛知県史』資料編Ⅱ・二五）がある。

今度於石瀬、無比類仕候、弥忠節肝用候、尚以高名無是非候、恐々謹言

八月朔日 元康御在判

寛平十郎とのへ

今度無比類矢を仕候、弥忠節専用候、恐々謹言

八月朔日 元康御判

坂部又十郎とのへ

『県史』は『寛永諸家系図伝』に基づいたと思われるが、永禄三年に比定している。前者に石瀬が登場する。尾張国知多郡には石瀬と石ヶ瀬という二つの地名がある。史料表記は「石瀬」だが、通常「石ヶ瀬」に置き換えて、『松平記』（『愛知県史』資料編14・3）の記事にある水野信元との石ヶ瀬合戦としている。石ヶ瀬合戦は史料に永禄元年、三年、四年としたものがあつて、『大日本』史料稿本（東大史料DB）では、石ヶ瀬合戦についての綱文を永禄元年此歳条、および永禄四年二月六日条の双方に掲載するものの、前者では寺部合戦の後、距離のある石ヶ瀬にて合戦することに疑問を呈している。後者では、『寛永諸家系図伝』（高木清方）、『創業記考』などの記述から、「永禄四年二月六日横根にて、翌七日石ヶ瀬（大石ヶ瀬）にて合戦があつた」とし、合戦はこの一度きりとする。永禄四年とする場合、水野との和平（永禄四年四月十一日か）後に、和平以前の二月合戦の感状を半年後に複数発給したことになる（『安城市史』通史編・六七五頁、『愛知県史』資料編11・六二〜六四頁）。ただし史料の通りの「石瀬」であれば、現在の常滑市、佐治氏の居城

大野城の東に地名がある（読みは「いしぜ」・『歴史地名大系』）。もし永禄三年、ここでの戦いとすれば、大野湊から背後に回った大野城攻めの可能性もあつて、そうであれば桶狭間の一連の合戦となる。この場合、ほとんど無傷だった鳴海城の岡部元信が刈谷城を攻撃したように、松平元康の部隊が海路での帰途に、佐治の本城である大野城を攻撃したことになる。まったく想定不可能ともいえないと考える。

二 降雹

（一）後巻・今川義元の目的と行動

義元の行程は『三河物語』に記されている。以下はその行程である（kmは鉄道行程表による）。

駿府↓（一日）藤枝（20・1 km）、先手衆は島田、金屋、仁坂、懸河

藤枝↓（一日）懸河（29 km）

懸河↓（一日）引馬（27・8 km）

引馬↓（一日）吉田（36・5 km）

吉田↓（一日）岡崎（32・3 km）、先手衆は屋萩（矢作）、鵜等（宇頭）・

今村・牛田・八橋・池鯉鮒

岡崎↓（一日）池鯉鮒（13・3 km、岡崎から杓掛であれば18・3 km）

先手衆がいて、義元藤枝宿泊の時には嶋田・金屋・仁坂・懸河に達していた、とある。日によって四宿使用もあれば、六宿もある。それほどの大軍であつたというニュアンスであろう。ただしこれに従うと、義元が池鯉鮒に達した時、前軍（先手衆）は四つ前方の宿に到達し、分散宿

泊したことになる（『実暁記』「自京鎌倉マテノ宿次ノ次第」永祿元年閏六月二十四日写、での宿は杳掛・鳴海・熱田・萱津）。実際にはそうはしていない。杳掛城では全軍の宿泊はできなかっただろう。義元軍は街道に溢れるほどの大軍ではなかったかもしれない。

岡崎までは安全圏だから順調な行軍だが、それより三河境に差しかかるあたりから、進行速度は遅くなる。軍事警戒域に入って、偵察し、兵を配し、安全策をとりながらの布陣だった。三河刈谷（荊屋）城主であつて、境川を挟んだ対岸、尾張緒川城も拠点とする水野信元や阿久比・久松がいたし、尾張知多郡には大野の佐治らもいた。この信長方武士団から、挟撃される恐れがあり、警戒の必要があつた。杳掛から大高はわずか8 kmほどで、岡崎からは26 kmだから、それまでの行軍のペースだったら、朝に岡崎を出ればその日には大高に到着できる。しかし織田方の軍事支配域の通過だったから慎重を期した。信長が出撃してくることは予測していただろうし、どのような迎撃が有利なのかを計算して布陣する必要があつた。

前夜は池鯉鮒經由で杳掛城（『信長公記』に宿泊した（『三河物語』は池鯉鮒宿泊のように記している。知立・杳掛間は約4 km。池鯉鮒＝知立城がある）。杳掛は鎌倉街道が通る。杳掛・桶狭間間は4・8 km、1時間半ほどの行程である。早朝に出たはずだが、昼前に桶狭間山に本陣を張り、停滞した。桶狭間山から大高城は4 km弱で1時間の行程にすぎなかった。各部隊はいくつにも分かれて、杳掛から鎌倉街道を行って、鳴海城の背後に向かうものもいたし、有松道に出てから桶狭間・大高道に入り、鷺津丸根の背後に回るものもいたであろう。

今川義元の目的は孤島状態にあつた鳴海城と大高城を救出して領域支

配の拠点にすることにあつた。すなわち『信長公記』に「後巻」とあるとおりで、藤本正行が「後詰」と解説している。「後巻」と「後詰」は同じ意味で、『日葡辞書』に「Virozume（ウシロヅメ）。または、ウシロマキ」。ごぜめともいう。城を包囲している敵方を背後から攻撃して、包囲網をとき、周辺の陸上軍事支配権を確立する作戦である。

義元は塗輿を帯同していた。『瑞光院記』や『歴名土代』（静岡県史）資料編7中世三・二七四七・四八）によれば、出陣直前の永祿三年（一五六〇）五月八日に治部大輔源義元を三河守に、従五位下源氏実（氏真）を治部大輔に補任するという宣旨が出された。三河は上国で守は従五位下、治部大輔は正五位下だから、位階としては治部大輔の方が三河守よりも上で、位相当では下位への任官である。

義元は前後して塗輿使用の認可も得たらしく、それを誇示するために塗輿を同行させた。輿は通常首にかけた紐で駕輿丁二人が吊る。行軍は馬に依拠したと思われ、義元も狭苦しい輿など使わず騎乗であろう。輿は馬よりもはるかに遅く、戦場向きではない。ただし毎日晴天とは限らない。道中、雨の日は輿に入り、兵は蓑笠で歩いた。

今川方は尾張国海西郡荷の上・鯛浦うぐいすの服部左京亮を味方としていた。木曾川河口である。木曾川も庄内川も天白川（黒末川）も河筋はいずれも沖合・伊勢湾で一つになっているから、服部左京亮にとっては潮汐を利用した大高・鳴海への往来は容易であつた。

対する織田方は中島砦を配置した。低地の立地だから、防御性に甚だ劣るが、述べたように内陸河川用の軍船を置いて、鳴海津を出入りする船を上流から牽制した。

至近に中島砦、周辺知多半島に大野衆・緒方衆、また膝下の精進川河

口の宮（熱田）・五条川（庄内川）河口の下之一色にも水軍を配置した。下之一色は天正年間、前田領で、『張州府志』は下一色城主を前田与十郎とする。

木曾川河口とその流域、および鳴海潟・愛知潟の制海権をめぐる戦いでもあった。勝利できれば、経済港・熱田の支配が可能になる。

『信長公記』に詳述はないが、必ず海での軍事行動はあった。今川義元はその情勢に応じて行動を展開し、信長軍を殲滅する必要があった。隊列は低地においては危険だから、常に優位な高地にるようにした。しかし全部隊が桶狭間山に布陣することはできないから、類似の山の上をいくつか占地した。当時の山は牛馬の飼料をうる草山か、または薪山で、常に刈られているか、枝葉も切り取られているかして、見通しはよかった。桶狭間山にいた義元の旗本衆は「三百騎」とあるので馬が三百頭、騎馬武者が三百人、雑兵が六百人、計九百人のはずである。桶狭間山はそれほど大きな山でもないから、混雑していたであろう。山頂には二つ引両・赤鳥の旗や馬印が翻っていた。¹⁷

蓬左文庫桶狭間図（図602-1）では今川義元墓や古碑のある場所を田楽狭間、屋形狭間とする。¹⁸「田楽が窪」は豊明市間米、二村山南にもあるし、桶狭間長福寺北に「田楽坪」と記入した地図もある。「窪」とよばれる低地形、窪地に今川軍が本陣を張ることはなく、追われての逃げ込み地か。

「田楽が窪」は『東の道の記』に「山立どもが出る」場所としてみえ、紹巴『富士見ノ道ノ記』また幸若舞にも登場し、知名度が高かった。天正十五年（一五八七）、雪斎三十三回忌にあたって作成された拈香法語（臨濟寺所蔵）では「尾之田楽窪」とある（『静岡県史』資料編8中世四・

一九三三）。万を越す大軍で多数が死傷した。千人塚のように将兵が敗死した箇所は各地にあった。

今川軍は東海道部隊のみならず、鳴海湊に集結した鰐浦水軍と三河水軍との連携を図ったのであろう。背後の緒川勢を警戒しつつ、水陸の連携を図るため、暫時東海道にほど近い桶狭間山に駐屯する必要があった。丸根・鷺津そして鳴海沖の戦況を確認し、信長の動向も把握した上で、迎撃の陣形に入る予定であった。各隊は相互連絡の必要上、次の指令が伝達されるまで、むやみには当初の約束地を移動しない。織田方の間諜（忍び）は馬印で義元本陣を識別できており、逐次信長に報告が行く。

（二）清州から宮へ・名古屋（那古野）城ほかに配備された兵と馬と武器

清州籠城戦術をとるか否か。『甫庵信長記』は林佐渡守が籠城を提言したとし、「道家祖看記」（『愛知県史』資料編11・六五）では林・平手が同調したとしているが、天理本では家老衆が提言したとのみある。陽明本ではそうした記述がない。境目の城において籠城する例は多い。長篠城、備中高松城、葦山城など。けれども最初から本城まで退いて籠城した例は、あまり聞かない。信長はすでに鷺津・丸根などに兵を配置している。

永禄三年、もし織田信長が最前線で戦う大高城包围隊（鷺津・丸根隊）、鳴海城包围隊（丹下・善照寺）や中島砦の友軍水野配下の梶川勢を見捨てて、清洲城から出なかったとしたら、その時点で将士の心は信長から離れる。勝算は得られなかった。信長には野戦以外の選択肢はないし、信長以外の将であっても、そうした。

『信長公記』に、「人間五十年 下天のうちをくらふれば」と歌い舞い、ついで「螺（かい）ふけ、具足よこせよ」と立ちながら朝飯を食べたとある。満ち溢れる緊迫の中に、余裕もみせた清洲城・信長出陣の様子は、『信長公記』の名場面である。しかし天理図書館本では前夜にも酒宴と謡があつたと記している。『甫庵信長記』も前夜に舞つたとしており、実際は前夜の方にリアルさがある。出陣前の夜、親しいものとささやかな宴を張ることはありうるし、感極まつて舞うこともあろう。ドラマ（語り物）なら出陣直前がふさわしいが、前夜、就寝前の酒宴の方が、不自然さはない。さらに、清洲からすでに具足を着用したとある。信長については分からないが、雑兵はこの段階ではまだ具足は付けなかったのではないか。

清洲から熱田まで、清洲を出たときは主従六騎、熱田まで「三里一時にかけさせられ」、熱田・源太夫宮から鷺津、丸根落城の煙を見たとき、馬上六騎、雑兵二百ばかり、とある。三里は12km、一時は2時間だから時速6kmで、ふつうに歩く速度の1.5倍、速かった。馬上の六騎には可能だが、徒歩の雑兵には困難に思われるし、もし具足を着用していれば不可能だった。

『道家祖看記』の表現だと「（清洲）城のうちをば、御小姓七八き（騎）にて出たまふ」、「大手の口にて森三左衛門・柴田権六（以下闕字）其外三百斗にてひかへたり」とあつて、すでに清洲城の随所で兵士が待ち構えていた様子がわかる。清洲城大手門外、勢溜にての集結である。

清洲城から熱田方面へは鎌倉街道を南下する萱津道と名古屋（那古野）に向かう枇杷島道（近世の美濃路）があつたが、名古屋から熱田道にすぎなり、管轄の城が複数ある後者を行ったと考える（『大日本五道中図

屏風』描かれた名古屋城・写された名古屋城』所収・参照）。枇杷島川（小田井川・庄内川）には橋がなかったかもしれないが、瀬はあり、徒渡にて進んだ。

この枇杷島道・熱田道沿いには名古屋（那古野）城・古渡城がある。信長直轄の城、駐屯基地である。今川義元が駿河を出陣したとの報告を得た段階で、これらの城に兵を入れたことは確実である。法螺をふき、出陣を知らせる前に、狼煙（まだ暗ければ篝火か花火）を上げ、早馬を名古屋に走らせ、名古屋からは古渡・末盛に、継馬が出た。同じようにして古渡からは熱田端城に、端城からは山崎城、桜中村城・笠寺砦、星崎城、丹下砦に伝達が行つた。『道家祖看記』では「ほしき面（ひかへたる）佐々下野守三百あまりにて」とあつて、星崎表で控えていた佐々政次が合流。前夜から星崎に宿泊していたと推測する。

清洲城の中を五条川が流れる。この川も感潮河川で、大潮の満潮時は水位が上がった。引潮なら舟運が使える。清洲城兵の多くは前夜までに船で河口に下り、星崎周辺に集結していっただろう。小荷駄も馬ではなく、船を利用して予め運搬していたと考える。ただし当日の早朝は潮が逆で使えなかった。

兵は前夜までに星崎か丹下周辺に集結すればよかった。武器甲冑・弾薬も食料も最終集結地に配置されていたから、そこで配布・装着したと考える。

前夜、鷺津、丸根両砦からの急報があつたというが、潮の満干は前からわかつていたことである。星崎か丹下かに入城・待機していた兵の一部を早朝に、両砦支援に増強する旨の指示は出せた。信長も各砦を放置し、見殺しにしたわけではない（鷺津、丸根側も夜についての信長自ら

の出陣までは要請していない。

時系列にて整理する。午前4時に出たとして、熱田まで一時(2時間)、三里だから足輕は3時間、ここで他の兵の到着を待つから午前8時ころまでいた。『道家祖看記』では熱田にて千七八百とある。信長の兵について、『信長公記』は「二千に不足」「二千に不可過」とし、『三河物語』は「三千ばかり」だから、それくらいの人数だった。熱田で大半が集結した。

馬は暑さに弱い。水を与え、また水をかけて冷やす必要がある(近世名古屋城にも三之丸柳原往還脇の堀に馬冷場・清水があった)。真夏であるし、急いだ。汗をかいた馬に乗り続けるよりも、各城に着くごとに交換するのが合理的である。予め、乗替の馬を各城に用意させてあった。騎馬武者の数だけ要るから相当な数の乗替の馬が配置してあって、名古屋城にも古渡城にも、馬と人が充満していた。信長自身も各城で乗替の馬(交換馬)に替えた。

熱田から鳴海は7km。「もみにもんで」も足輕たちは2時間弱かかる。午前10時から11時には鳴海周囲の砦に滞陣していた。まもなく午の刻になる。

星崎で合流があったように、予め兵を配置、武器弾薬、甲冑、食料も入れている。信長主従がわずか六騎で出発しても、途中に待ち受けていた兵と合流していくから何ら支障はなかった。雑兵は甲冑を着ずにただ走って、前線基地・丹下砦か善照寺砦で武装した。信長に従う武将も各城にて、できる限り新しい馬(乗替馬)に換えた。信長も最終の基地で、一番の駿馬・愛馬に乗り替えた。

猛暑のなかでの行軍であった。清洲から重装備で疲弊しては、最

上のコンディションで戦えない。戦場についた段階で疲労困憊というわけにはいかなかった。決戦を迎えるために必要な条件が、軽装での進軍である。体力温存を優先し、決戦に備えた。

(三) 宮から鳴海 下道と上道(東海道)

熱田からは潮が満ちていたため、上の道を行ったとある。

『春のみやまぢ』(飛鳥井雅有)、『海道記』、『東関紀行』など中世の紀行文によれば、多くの旅人が熱田以南は年魚市(愛知)・湊・鳴海湊を通る「下の道」、つまり干潟の中の道を行った。常時の通行は不可能、通行時間に制限のある道である。ただし紀行文筆者らは一刻を争う旅人ではなかった。古来、歌に読まれた名勝・年魚市(愛知)・湊・鳴海湊で引き潮時の景色を見、田鶴や浜千鳥を見ながら、歌を詠むことが目的であった。潮が引いていく様はなかなか壮観なものであったと、彼らは一様に書き記している。飛鳥井雅有の場合は酒を三百杯ほど酌み交わして待機した。三百杯とは和漢朗詠集の三百盃をふまえた比喩である(『中世日記紀行文学全評釈集成』三卷)。景色、和歌を詠む情景体験を優先させていた。雅有によると「五十町といへども、道よくて駒もはやければ、程なく鳴海の宿に着きぬ」とある。しかし鳴海まで五十町(5km強)全てが海浜だったわけではなく、3kmほど行って、その先は笠寺にあらなければ鳴海には到達しない。

星崎表で佐々政次が信長を出迎えた。星崎城は笠寺・鳴海道から奥まっているが、「是ヨリ往還迄二百九十間」とあって、さほど遠いわけではなかった(一間六尺ならば522m)。佐々政次は街道筋、「ほしきき面」で信長を迎えたのであろう。¹⁹⁾

海の中の道が本道とは思われない。馬は軟弱な干潟の浜を行った場合、足を取られやすいし、人も歩きやすくない。馬にも人にも不適な道である。熱田・鳴海を結ぶ上道は東海道（鎌倉街道）・京街道の本道で整備されていた。熱田と笠寺を結ぶ山崎、戸部を経由する道は直線に干潮時の海浜を通する道よりはわずかに遠いという程度で、さほどの大回りではない。下道が格段に早道であったわけではない。

かくして信長勢は笠寺・星崎表まで、つぎつぎに兵力を集結し、最前線、おそらく丹下砦に到着し、初めて武装を整えた。丹下砦・善照寺砦・中島砦は鳴海城を完全に包囲していたから、鳴海城攻撃という選択もありえたらうが、枝葉と見た信長はそのような下知はしなかったし、鳴海城も城から出られなかった。織田方は包囲警戒の兵のみを残す。『信長公記』の記述では脇が深田であった中島までのやりとりが詳述され、山際に急雨に遭遇したように書かれるが、急雨は「敵の輔（つら）に打ち付け、身方は後の方に降りかゝる」とある。信長は急雨を避け得たのだから、砦の建物の中にいたか、民家があるところにいたかのいずれかであるが、砦と考える。

丹下砦・善照寺砦・中島砦の三砦、おそらく高地にある前二者に分れて信長隊は大休止、昼食を取った。²⁰ 腹が減っては戦はできぬ。

(四) 朝合戦

丸根にいた佐久間大学は「打モラサレて落て行」(逃げた)と『三河物語』にある。鷺津山にいた飯尾近江守父子のうち、父定宗は戦死した。その子隠岐守(天理本、『寛政重修諸家譜』8—166によれば信宗)は生存している(飯尾は織田一族で、『三河物語』によれば定宗は信長従弟、

『寛政重修諸家譜』では筋違従兄)。織田玄蕃秀敏(定宗叔父、織田信長大叔父)についての生死は不明(『同上』167)。かれら生存グループはいずれかの時点で信長本隊に合流したか、いずれかの砦で休息しただろうが、その仔細はわからない。

丸根では攻める側も松平善四郎、高力新九郎、笥又蔵が戦死しており(『三河物語』『松平記』、激戦であった。織田方の前田又左衛門は「朝合戦」で頸一つをあげている(『信長公記』)。落城はしたが、玉碎・全滅ではない。均衡は保って、兵力を決定的に損なうまでの敗戦ではなかった。ほどの防戦で逃げた。

(五) 降雹直撃 桶狭間山本陣

雹が降った。述べたように雹は夏に降る。急激な上昇気流(入道雲・積乱雲)があつて、上空の氷点下の冷却気層にまで達していた(『甲陽軍鑑』は「夏なれどひやう(雹)ふり」としているが、雹の基礎知識が欠けている)。

今川義元もまた桶狭間山にいた。そこで雹に遭った。『三河物語』に「義元ハ(略) ベントウヲツカハセ給ひて、ユク／＼トシテ御給ひシ処ニ、車軸ノ雨ガ降り懸ル」と見えている。『明月記』元久二(二二〇五)年正月五日条に「此間雨脚如車軸」とある。車軸ノ雨、で車軸のように太い雨、大雨だった。弁当をつかつてユク／＼(ゆつたり)としていたところの土砂降りという。「水野勝成覚書」(『愛知県史』資料編14・軍記史書六)に「尾州なるみ・おけはさまにてひる弁当上り被申所を」とある。『松平記』では「昼時分大雨しきりに降る」とある。

今川義元は「おけはさま山(桶狭間山)に人馬の休息」とある通り、

馬とともに山に上がって布陣していた。暑い日で朝からずっと晴天であった。駐屯の段階ではないから、仮の陣である。休息なら甲冑は脱いでいた。

「関ヶ原合戦屏風」（津軽屏風）を見ると、東軍では岡山陣所、松平下野守陣所など、西軍では嶋津陣所、小西摂津守、石田治部少輔など、茅葺の簡易な建物が描かれている（『戦国合戦絵屏風集成』3、西軍建物はいずれも炎上中）。今川方も簡易な建物を仮設したかもしれないし、あるいは幄舎（テント）の用意があったかもしれない。しかし万を越すとされる兵士全員を収容できる建物などない。朝から行動していたから、11時頃に昼食になったのではないか。大半は露天で弁当を食べ、馬は飼料を与えられている最中だった。昼食中に大雨となったことは強く鮮明に記憶されており、各書の記述が一致する。同じ時間、信長は善照寺か丹下の砦にいて、雨になった。

降雹は積乱雲の急発達によるから雷雨も伴う。空気が急上昇するから、急な風も吹く。『信長公記』のいう杳掛峠の松が東に根から倒れたという記述は、事実であるなら、積乱雲が東に抜けた後の話であろう。雹を含む雨は氷雨である。氷雨に濡れ、強風のなかにいれば、大きな負担がかかった。

二〇二〇年八月二十二日の長野県上田市の雹の光景をyoutubeで見ることができた。²¹土砂降りで、「車軸の雨」とはこういうものかと思われる。これを気象庁の過去気象データ検索（10分ごとの値）で見てみる。降雹1時間前にそれまでの好天が曇りだし、15時30分には10分間に8.5mmの降水となって（1時間雨量48.5mmに相当）、34度もあった気温が20度まで、と一気に14度も下がっている。風速毎秒1mで体感温度は1

度下がるとされる。風速は15mあったから風力は7の強風で15度下がったとすると、あわせて29度下がった可能性がある。雨量は傘も役立たない「激しい雨」であり、蓑笠ではあまりに過酷だった。

雷に気づいてまもなく、大雨になる。馬は木々に繋いであり、放置して逃げるわけにはいかない。雨では火薬の保護が最優先されよう。どのようなにしても兵士が激しい雨に濡れることは避けえなかった。今川義元だけは輿の中に入ることができた。

降雨は氷を含んでいた。大きな塊が当たると怪我や、脳震盪を起こす。直径5cmの雹塊だと終端速度は秒速33mになる。²³

蓑笠の下に着物はまるで濡れた雑巾になる。着衣水泳に似た状態になって、運動能力は激減し、体感温度は下がり続けた。かなりの人数が低体温症になる。

対する織田信長軍は城砦を辿りつつ東海道路筋を来ている。いずれかの

時分	降水量 (mm)	気温 (℃)	風向・風速 (m/s)				日照 時間 (分)
			平均	風向	最大瞬間	風向	
14:00	0	33.8	1.4	西南西	3.3	西北西	10
14:10	0	34.5	1.00	西南西	3.0	西南西	10
14:20	0	34.3	1.2	西	3.6	西南西	10
14:30	0	33.1	1.3	西	4.7	西北西	4
14:40	0	32.9	1.4	東南東	4.4	西	5
14:50	0	31.6	1.6	南東	6.5	南	3
15:00	0	30.6	2.2	南南西	5.3	南	0
15:10	0	27.3	1.9	北東	7.2	北東	0
15:20	0.5	23.0	7.6	北北東	14.5	北東	0
15:30	8.5	21.1	9.7	北北東	15.9	北北東	0
15:40	8.5	21.4	4.9	東北東	13.9	北	0
15:50	3.5	20.3	5.1	北東	7.4	北東	0
16:00	1.5	20.9	3.7	北東	5.8	北北東	0
16:10	0.5	20.9	1.8	北	4.4	北東	0
16:20	0	20.6	0.6	南南西	2.0	西北西	0
16:30	0.5	20.3	0.5	西	1.8	西北西	0
16:40	0	20.7	0.4	西北西	1.6	西北西	0
16:50	0	21.1	1.9	北	2.8	北	0

表2 2020年8月22日
長野県上田市の気象データ
(14時から16時50分まで)²²

城砦にて、この雷雨を避けることができた。昼であり決戦前である。今川義元たちが食事をとろうとして氷雨に打たれた時間帯と同じ時間帯に、織田軍は決戦前の昼食を取った。路上ではなく、善照寺砦か、丹下砦か、中島砦か、そのすべてか、屋根があり、井戸もあるところで食事をとった。突然雹の粒が降ってきた。雷鳴そして大雨になったけれど、建物に入って雨宿りができた。

信長は歓喜した。軍師・軍配師から雹を作りだす積乱雲が30分以上持続することはないとの助言を得る。彼らは陰陽道のみならず、天文道を知り、気象予報士でもあった。予告のとおり、やがて晴れた。

天は信長に味方した。『信長公記』に「(急雨石氷を) 投打様に、敵の輔に打付る、身方(味方)ハ後の方に降かゝる」とあるのは、降雹回避の比喩的表現である。今川方は鳴海城からの狼煙も雨で薪が濡れて使えなかったものか。信長の動きを本陣に急報できなかった。これほどの豪雨の中に30分もいたら、大半の鉄砲火薬は使用不可能だった。

(八) 惣崩・鉄砲隊射撃

「空晴るゝを御覧じて」とある。信長はしばらく豪雨が止むのを待っていた。

信長は本陣だから、先頭に立つことはない。一部は大高城および鳴海城の備えに数百人を残し、鳴海潟に到着した大野・緒川衆を支援した。彼ら鳴海包圍隊と丹下砦・善照寺砦そして水軍中島砦は、今川軍船と大高・鳴海両城を強く牽制していて、拮抗状態を維持し、義元が安易に大高に入れない状態を作り出した。足止めしたと推定できる。

海道筋を行く本隊は、複数の道を並行して行軍した。敵からの攻撃を一切排除すべく、面的に制圧していく行軍が理想だが、急行を要する。道の一本は鎌倉街道(二村山)で、もう一本は桶狭間道(東海道筋)を騎馬隊が走った。²⁴いくつかの山に分散している今川軍の右備え、左備え、それぞれを突く。

「信長御覧して中嶋へ御移候ハんと被仰候」とある。扇川に架かる東海道の橋が中島橋である。信長は東海道を進んだ。奇襲の反対概念は正面戦である。正面戦であれば、今川陣が前面に鉄砲隊、弓矢隊、ついで槍衾を備える陣容で待機し、そこに信長隊が突入したことになる。それはなかった。すなわち互いの正面戦ではなく、待機していない兵を側面から衝く奇襲である。信長隊の陣容は整っており、前面に鉄砲を配し、ついで弓、槍の布陣だった。

「信長、鎧をおつ取て大音声を上けて、すはかかれく」と仰られ、黒煙立て、懸るを見て、鉄砲隊が火蓋を切った。「黒煙」をたてながら、襲いかかった。今川重臣、朝比奈一族・丹波守親徳が鉄砲に中あたっている。すなわち合戦三ヶ月後の永禄三年八月十六日朝比奈親徳書状(写、安房妙本寺文書、『愛知県史』資料編11・26)に「仍不慮之仕合義元討死無是非次第、不可過御推察候、拙者儀者最前鉄砲二当、不相其仕場候、雖然至于只今存命失面目候」とある。鉄砲が的中するということは50m程の至近からの射撃を意味する(それ以上距離があるとの中ではむしろ、威嚇のみになる)。信長鉄砲隊は敵の部将の眼前に迫っていた。朝比奈親徳は急所が外れたのか、狙撃死は免れた。義元の死の場にいなかったようで、別陣にいたと推定する。

『信長公記』は合戦が二度あったと把握している。一度は「朝合戦」、

一度は「惣崩」(天理本は大崩)である。前田又左衛門は前者で頸を一つ、後者で頸二つをとった。桶狭間の戦いは「惣崩」を指す。

水をまくるかことく、後ろへ、くはつと崩れたり、弓・鎗・鉄炮^(界)のほり・さし物、算を乱すに異ならず

今川方は、鉄砲ほかが使えず(「算を乱す」)、惣崩・大崩、完全崩壊になった。「未の刻」(午後1時から3時)、精鋭部隊が孤立した本陣に突入。雨に濡れていても、二つ引き両ならびに赤鳥の紋²⁵の旗、馬駿が林立し、本陣の位置は明瞭である。

「塗輿を捨て、くつれ逃げけり」、「旗本は是也、是へ懸れと御下知在」。義元の旗本も最初は三百騎、それが次第に五十騎とあり、輪になつていった。探さずともわかる。雨でずぶ濡れの今川軍は、着衣は絡みがちで、なかに甲冑を着ける時間がないものもいた。気温の低下と強い風に、なす術はなかった。

「御馬廻、御小姓衆、歴々、手負死人不知(其)員」と悲惨な場面が続出した。

「敵の御大将、討ち取つたり」、程なく大音声が、なり響く。

むすび 桶狭間は海陸の合戦

本稿は桶狭間の合戦は大高城と桶狭間の間の局地的な合戦ではなく、伊勢湾海上の水軍を含めた陸海の合戦である、と考えた。『信長公記』天理本は、織田方の大野衆、緒方衆の存在を記述している。敵方、今川水軍については、鯛浦の服部左京進についても記述していた。そして大高城には

熊野水軍たる鵜殿水軍がいて、中島砦には緒川衆の一員たる梶川水軍がいた。かれら水軍の行動記録の詳細は書き残されなかった。だが必ず彼らは五月十九日に軍事行動を起こした。水軍として連動した軍事行動をとっている。

早朝に三河水軍が松平元康指揮のもと、おそらくは海からの大高城兵糧入に成功し、あわせて船に乗っていた兵員が鷺津・丸根を襲撃した、と推定した。大野衆、緒方衆は松平元康軍への妨害、反撃を必ず行う。鳴海潟で潮の干満に連動した海戦があった。

大高兵糧入の軍船からの兵が鳴海城も支援していた。今川義元は派遣水軍との連携作戦を考えていた。わずか一時間で入城できる距離にまで到達していたにもかかわらず、安全地帯たるはずの大高城目指して、即座に入城するという行動を取らなかった。義元は出陣してくる信長完全殲滅のための海陸連携を模索しており、信長の動向、鳴海潟の敵味方の優劣、後方にいる知多郡北部の信長勢力などの情報を集約した上で、最も有効な布陣を模索し、桶狭間山で停滞していて、降電という天災に見舞われる。それが命取りになった。

天佑を得た織田信長と天に見捨てられた今川義元、桶狭間ではそのちがいが決定要因になった。これが本稿の結論である。背景に双方の水軍による海戦の展開があつて、大高城は大野・小川(緒川)の反撃で、けつして磐石ではなかった。鳴海城は緒川水軍・梶川により戦闘機能を失っていた。義元は大高入城ではなく、野戦での信長迎撃を選択した。気候・天候からの偶然要素は大きかったが、そのみではない。桶狭間合戦の真相、信長の勝因は水軍を含めての緊張した軍事情勢を作り出し、鳴海城を機能させず、義元を桶狭間山から前進させなかったこと、それらにある。

0 藤本正行『桶狭間の戦い』二〇一〇・洋泉社は、「満潮で織田軍が来援しにくい時間帯だった」とのみ記述している(『桶狭間・信長の「奇襲神話」は嘘だった』二〇〇八・洋泉社は異題同本)。これが通説で海は阻むものであって、逆の、海を利用する視点はない。高田徹「戦場を歩く」(『織豊期研究』9、二〇〇七)は海に言及はするが、やはり否定的である。いっぽう天理本を重視した桐野作人『織田信長 戦国最強の軍事カリスマ』(新人物往来社、二〇一一年、のち新人物文庫・二〇一四)には海からの視点がいくぶんあるし、橋場日月『新説桶狭間合戦』(学研新書・二〇〇八)はより積極的に海を論じていて、海と季節風の制約に注目する。しかしながら海からの合戦全体はまだまだ描写されていない。

1 関係史料集に、『愛知県史』資料編11、14、『静岡県史』資料編7中世三、8中世四、『豊明町誌補遺編』など。『信長公記』首巻は角川文庫(陽明文庫本)、『清洲町史』。本稿では陽明文庫本と天理大学図書館本を対比する上記『愛知県史』資料編14を使用した。天理本は松江堀尾家に伝来した(金子拓編『信長記』と信長・秀吉の時代』三九頁。『愛知県史』資料編14解題)。

2 beachhead は橋頭堡とされることもあるが、橋頭堡 bridgehead は川の対岸、橋を渡った側の基地(拠点)をいう。近世の諸藩の多くも海岸・河口に築城し、船着・船手を置いた。

3 大高の本町水準点は2・8 m、寅新田はマイナス3 m。名古屋港の潮汐上昇レベルは標高1・1 m強。伊勢湾台風で長期浸水した区域は中世以前には海だった。大高辺では東海道線より西の天白川以南地域は三十日以上浸水した。

中部災害アーカイブス (http://www.cck-chubusaigai.jp/kinmen_saigai/19590926.html)。なお富田庄絵図も参考になる。

4 土佐国蠶簡集残編については森田香司「土佐国蠶簡集残編の史料性格」(『静岡県史研究』11号)。蠶簡集を収録した『高知県史』には県外史料として未収録。

5 三月二十日氏純書状「古文書集」『静岡県史』資料編8中世四・補遺編二三五、四月十二日

水野十郎左衛門宛今川義元書状・別本土林証文、『静岡県史』資料編7中世三・二七四〇。大樹寺宛 朝比奈泰朝書状・大樹寺文書、『静岡県史』資料編7中世三・二六二八)。

6 『寛永重修諸家譜』、鶴殿秦氏、巻十八・一六三、「武辺咄聞書」(延宝八年・一六八〇編纂)にも「義元妹婿鶴殿長持」。

7 『紹巴富士見紀行』に尾張亀崎(半田市)の二里ほど南に、「熊野崎」とて、三熊野に向かへる洲崎」があると記されている。(永禄三年)六月二十七日、今川氏真は熊野那智社実報院に尾州不慮に関する書状に返書している(『愛知県史』資料編11・一八)。東海海域は熊野地域とは交通・軍事の上で密接な関係にあった。

8 今川から離れられなかった鶴殿宗家は凋落したが、織田方についた鶴殿氏の後裔は栄えた。桶狭間合戦以降の鶴殿氏、あるいは熊野の鶴殿氏については『愛知県史』資料編11・一〇八、同上』一八九、「日扇書状」二二五、二二七、「渡辺忠右衛門覚書」鶴殿十郎三郎『同上』資料編14・八)ほか。鶴殿長照の従妹に西ノ郡の局がおり(長持弟長忠女子)、徳川家康の側室となつて、督姫を生んだ。督姫は北条氏直に嫁ぎ、その死後は池田輝政に再嫁した。その子孫は鳥取藩主となったから、藩主外戚の家として鳥取藩で存続した。

『鶴殿家史』蒲郡郷土史研究会、一九八二

『蒲郡市史』本文編1 原始古代編・中世編、蒲郡市史編さん事業実行委員会編、二〇〇六

『鶴殿村史』通史編「中世の鶴殿」執筆播磨良紀、三重県鶴殿村、一九九四、史料編一九九一。天正九年二月二十九日に織田信長から朱印状を得た熊野新宮神主(別当)・堀内新次郎は同族で(『織田信長文書の研究』下、下記阪本論考)、元亀三年(一五七二)堀内女子が鶴殿孫十郎に嫁いでいる。

菊地浩之『徳川家臣団の系図』角川新書、二〇二〇

『鳥取藩史』第1巻 藩士列伝 鳥取県編 鳥取県立鳥取図書館刊、一九六九

平野仁也「十八世紀における家史編纂…鳥取藩家老鶴殿長春と『鶴殿家史』」『地方史研究』六五巻五・二〇一五

阪本敏行・藤井寿一「熊野新宮堀内一族にかかわる江戸時代前期の新出史料の紹介と解説」『和歌山地方史研究』第七五号、二〇一八

9 「本地・鳴海古城跡之図」(蓬左文庫蔵228-1)によれば、鳴海の町は北から丹下町・三日町・根小屋町・広町・相原町、と続き、扇川を渡って中島町になった。三斎市地名である三日町や城下地名である根小屋町は潮汐の利点を活かした立地であって、大潮満潮には勞せずして船が上ってくる。中島砦は、小河川の合流地ではあったが、おそらく潮汐利用には制約があり、そこを基地とする以上、潮汐を逆手に取った戦闘技術でカバーする必要があった。

10 「桶狭間之図」(蓬左文庫蔵602-1)では、合流点から下流を黒末川としている。602絵図は梶川屋敷を中島村民家に記し、「此所中嶋ノ砦跡と云」としながら、別位置に中島砦を描いている。これは『尾張御行記』ほかの通説とは異なる。町名は602絵図の方では丹家町・横町・花井町・根小屋町・本町・相原町。

11 『寛永諸家系図伝』では梶河高秀(平左衛門尉)子が一秀(七郎右衛門尉)で、中島城を守り伊丹で戦死した人物だとしている。『信長公記』の記述には合わない。高秀弟秀盛は高麗陽川城で戦死したこともある。

12 気象庁ウェブサイト潮位表より作成。

<http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/>

13 仮に大高城に八百人の兵士がいて、一人一日精米四合を食べたとすると、一日に必要な米は三石二斗で、四斗俵なら精米で八俵、粃つきの穀米なら二俵の十六俵になる。五斗俵であれば精米六俵強で穀米なら十三俵弱となる。三百俵は穀米・四斗俵なら八百人の兵士の二十日弱の分、五斗俵なら二十五日分である。

馬一頭で三俵(左右振り分けに鞍上)を積むとして三百俵には百頭(百駄)、二俵を積んだとすれば百五十頭(百五十駄)が必要である。小荷駄隊による兵糧入では、馬は道を一列縦隊で一頭ずつ進み、両側を弓や鉄砲を持った兵が警護しただろう。長い隊列になる。

敵地である。両側に山が迫り、低地を行くような地形では襲われやすい。いかにも至難である。

久保健一郎『戦国大名の兵糧事情』(吉川弘文館・歴史文化ライブラリー、二〇一五)があげる兵糧入では百四十俵から六百俵まであり、平均して三百五十俵弱である。ほかに(天正九年)五月十九日吉川経家書状(吉川文書)では因幡私部に「但州兵糧卅」を入れたとあり、出雲新山から高瀬に兵糧を入れた例があるが、籠城時に少分の兵糧を籠めると、却って城が弱ると証言されている。三十は三十俵であろう。この程度だと得るものより、失うものが多かった。三十俵は馬十頭だから、通常これよりは長かった。

14 後世の史書では松平元康の行軍は陸路が大前提で、『松平記』では鳥居四郎左衛門・石川十郎左衛門による物見や、山上の敵の記事があり、『三河記大全』では「元康千余騎を率いて、『松平記』では「敵陣の間を通りて、などとしている(『朝野旧聞哀藁』二一七四〜一七五頁)。これらを読めば、陸路であると思うかもしれない。しかし『朝野旧聞哀藁』はこの兵糧入を永禄二年として編纂した。記述は錯綜しており、杉山博『戦国大名』は、大高城兵糧入れは永禄元年、二年、三年説があつて確定できないが、自身の職場である東大史料編纂所が刊行している『史料総覧』が三年説を採用しているから仮にそれに従う、としており、定説はないとする(史料編纂所の「史料稿本」は複数説を紹介している)。永禄二年に大高口で合戦があつたことは一次史料に明瞭である(前掲、本稿十七頁)。史書が桶狭間と梅坪合戦を併記する例が多いが(『伊東法師物語』同上、二一七六頁、『武辺咄聞書』同上、二一七八頁)、梅坪合戦は以前にもあつたし、桶狭間後の永禄三年九月十日にも四年四月にも、くりかえされている(『静岡県史』資料編7中世三・二九六、『愛知県史』資料編11・一〇三)。寺部・梅坪は桶狭間から遠見が効くような場所ではない。『家忠日記増補』(家忠曾孫忠冬編纂)になると、永禄三年五月十七日に元康が阿久比にて生母お大や異母弟に会ったことになっているが、合戦直前に織田方阿久比という敵対勢力のもとにいた生母や弟に会うなど、ありえようか。後世の書き足しが多く、混乱を極める。

15 『信長公記』に鯛浦うかいの服部左京助の武者船が千艘計、海上を蜘蛛の子を散らす如きであった、と記しているが、二十挺艦の小早として千艘であれば水主が二万人、兵士が五十人乗るとして五万人で、合計七万人。信長の兵力が二千に足らずと記している。千艘という数を信じることはできない。

16 『戦国遺文』今川氏編1544・藤枝市郷土博物館所蔵岡部文書、ほか『土佐国靈簡集残編』三など、『戦国遺文』今川氏編1573・1547も同様。

17 合戦の場所について、永禄三年十二月二日今川氏真判物写（土佐国靈簡集残編、『静岡県史』資料編7中世三・二八六〇）は「天沢寺殿尾州於鳴海原一戦」としている。尾州なるみ・おけはさま」という表現は後掲の「水野勝成覚書」にもある（二八頁）。鳴海から桶狭間にかけての広範囲が戦場であった。うち義元本陣は『信長公記』にあるように「桶狭間山」、つまり「桶狭間村」に所在していた山である。桶狭間山の北方、これまでも研究者が指摘してきた標高64・9mの山を中心にした標高50m以上のいくつかの高地に比定できるだろう。現在の地図では南館の位置に相当し、宅地開発により山の形は存在せず、かつて存在した三角点（測量基準点）さえも失われている。仮に義元勢が一万人いたのなら、桶狭間山九百人と同程度の山が十ヶ所必要だった。つまり今川陣は桶狭間山以外に十以上あった。桶狭間村周辺の高地である。

18 この蓬左文庫「桶狭間図」（図602-1、『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第四・桶狭間古戦場、大正十五年杉山棄三郎執筆、名古屋市教育局『桶狭間古戦場調査報告』付属地図に同じか）では桶狭間村長福寺北東、二つ池から東方に桶狭間山、その北に松井常信家、馬立松、義元駿ノ松・討死ノ跡を記し、屋形狭間を「合戦前ハ田楽狭間」と記す。従来の田楽が窪を義元戦死後に屋形狭間と呼んだ、との意である。桶狭間山は有松から桶狭間村に向かう道（通り狭間）沿い、長福寺から北東になる。

天保十二年（一八四一）桶狭間村図面（『尾張国町村絵図』名古屋域編、『大府市誌』近世村絵図集）には、生山（ハエ山）、武路（タケジ）山、高根山など山の名前が記されて

いる。これらの山に今川勢が布陣した。明治の小字を記す『愛知県地名集覧』桶狭間村に、田楽がついた小字名はないが、巻山、幕山が見える。延享二年（一七四五）桶間部類大脇村山絵図（国会図書館蔵・前掲報告）には石塚山が見える。

19 蓬左文庫「星崎城図」は二種あって、「愛知郡星崎村古城之図」（図209-1）にみえる星崎城は、西は海、東は田と南の村への道筋、南は池と堀、中心に本丸、二丸、三丸を配する。別の「愛知郡星崎村古城之図」（図129-56）でも、本丸から三之丸、さらに周囲に外郭があつて、周囲には堀道がある。本地村星の宮の北側に城跡を記す。西は海に面する。大きな要害であつた。『日本戦史』付属地図（二万分之一図）には、北から西に水堀の跡と堀切を挟んだ二つの曲輪、そして13・9mの水準点を記している。星崎城の跡である現在の笠寺小学校の標高は6mであるから、8mも削平され低くなっている。

20 蓬左文庫「本地・鳴海古城跡之図」（図228-1）によれば、丹下砦は東海道（鳴海道）を押さえる位置にあつて、主要な曲輪が三つある。天白川を越えた東海道がほぼ90度に曲がった先、街道のすぐ脇に西曲輪が二十五間二十七間、その東が三十五間二十八間あつて、さらに六十三間三十五間、三十三間四十三間など、広い曲輪があつて、その周囲にも小さな二つの曲輪があつた。規模は鳴海城と同等だった。信長隊はこのまま東海道（鳴海道）を前進すれば、街道の真上にあつた鳴海城から襲撃されるから、善照寺への別道（裏道）を直進した。

21 <https://www.youtube.com/watch?v=xhZCZ58Sno>

22 気象庁ウェブサイト長野県上田市の気象データより表を作成
https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/10min_at.php?prec_no=48&block_no=0402&year=2020&month=8&day=22&view=

23 関東地方における雹の被害

防災コラム <http://takemizu.life.coocan.jp/bousaicolumn/column/14hyou/hail.html>

24 有松道を慶長初年の新道とする根拠は慶長十三年・一六〇八の桶はさま村新町諸役免許証

状（『有松町史』）だが、新町はできたかもしれないが、もともとの町もあつたはず。鳴海宿から隣の有松村、落合村あるいは桶狭間村の道がなかったということはあり得ない。近世東海道は、道として合理的な地理的与件を選択しており、その条件は永禄段階でもそれ以前でも変わらない。

25 その由来は『難太平記』である。

《Title》

Consideration of Okehazama-no-kassen battle

《Keyword》

Beachhead, hail storm, navy, Okehazama-Yama, Oda Nobunaga, Imagawa Yoshimoto, Matsudaira Motoyasu (Tokugawa Ieyasu) , Oodaka jyo Castle, Udononagateru, Kumano navy, Kajikawa Heizaemon, Narumi jyo Castle, Hyourouire; Entering the provisions food and soldiers, Onosyu, Ogawasyu, Shincho-kouki (Tenri University Library Collection), Mikawa-monogatari

